



巻頭座談会

府民の学びの場としての府立大学

在学生のみならず、多くの人々の人生を豊かにするための手段として生涯学習の果たす役割はますます重要になっています。本号では「地域貢献特集」の巻頭座談会として、本学の生涯学習に果たす役割や期待について語っていただきました。

■野間 今日、大学は、教育研究、研究教育、そして地域貢献という3つの重要な柱をもっています。地域貢献には、研究で得られた新しい知見をさらに府民に還元するという役割がありますが、もう一つ、生涯学習支援という大きな柱があります。それには、大学主体で行う支援——座学中心の公開講座や、施設見学・体験学習を含む実体験型講座などがあります。もう一つは、大学、学外の組織等と共催で、地域の生涯学習に貢献するという事業があります。本学でもこれら事業を複数展開しておりますが、今回はその中でも特に、(財)京都SKYセンターを中心とした本学の生涯学習活動についてお話しただけだと思っております。

まず学長からお話をお願いしたいと思います。

地方の時代における公立大学への期待

■竹葉 今日、地方の時代ということで様々な課題が出てきています。自治体によって、看護や福祉、情報、環境等いろいろと要望がありますが、公立大学への期待がこの間非常に高まってきています。厳しい財政の中でも公立大学を積極的に活用・運営し、その役割を果たしてほしいという機運が全国的に高まってきている。大学の教員にも、ある意味非常に高い技量が要求されている、そういう時代だと思えます。公立大学の役割が変わってきたと言えるのではないのでしょうか。

その中で3つ目の柱としての地域貢献、それを教員

の活動の指標にも今後反映していかなければならない時代になってきているのではないかと考えています。地域貢献の中でも多様な領域があります。産学公連携として取り組んでいる様々な研究支援という形のものもありますが、本日の座談会では、特に府立大学が果たす生涯学習(教育)領域での役割に絞ってご意見をいただき、今後の事業に反映させていきたいと思っています。

■野間 では次に「新・京都SKY大学」の共催団体のお立場から、「府民の学びの場として府立大学」ということも考慮に入れながら、ご意見を願います。

教養と仲間づくり～新・京都SKY大学

■泉谷 「新・京都SKY大学」は、概ね60歳以上の方を対象に、週1回の講座を設け、1年間学習していただいています。当初は、高齢者の方々の旺盛な学習意欲といえましょうが、自らの知識を高めたい、仲間づくりをしたい、この声に応えることで平成2年にスタートしました。しかし、それだけでいいのかが問われるようになり、修了後に学んだことを地域で活かしていただく人材養成(人づくり)の視点を加え、平成15年にそれまでの「SKY大学」に「新」を付け、「新・京都SKY大学」として運営してきています。都道府県単位で類似の大学が30校余りありますが、全国的にみて、京都府のSKY大学は2つの優位性をもっています。まず一つは大学を多数

■座談会メンバー(順不同・敬称略)

竹葉剛(学長)・泉谷隆信(財団法人京都SKYセンター(※)副理事長)・野間正二(生涯教育委員会)
水本邦彦(文学部教授)・N.K.(社会人入学生)・築山崇(福祉社会学部教授・広報委員)

目次

・巻頭座談会……………	1	・教育面での地域との連携……………	8
・府立大学の生涯学習事業……………	4	・平成18年度ニューフェイス……………	8
桜楓講座……………	4	・研究室へようこそ……………	12
リカレント学習講座……………	5	・卒業生の声……………	12
地域文化セミナー……………	6	・編集後記……………	12
新・京都SKY大学……………	6		
農場ユースカルチャーデー……………	7		
演習林野外セミナー……………	7		

有する京都にあることから、先生方も、常に切磋琢磨されていますから、非常に優秀で、知識の豊富な先生方が多いという環境があります。そしてもう一つは、京都には超一流の文化人が多くおられること。しかも茶道、能、舞踊、陶芸などなど達人ばかりです。そういう方々が府民のために、「それなら私、講師で行きましょう」と積極的に言っていていただきますので、受講生の方ももちろん、主催者にとっても大変ありがたい環境の中にあります。

OB会のひろがり、地域活動への参画

とりわけ、府立大学の先生方には、全講座の約2割を御担当いただくなど、たいへんお世話になっています。受講生から、府立大学の先生方は、我々の目線に立って話をさせていただいているということをよく聞きます。受講者が高齢者であること、専門には疎いということ、加えて知識意欲をかなり持って参画しているということ、そういった事情を踏まえお話ししていただいている、と非常に好評です。そういう内容のある講義に支えていただき、修了生が自主的につくるOB会組織も育ててきており、そこではOB自ら様々な学習や見学の場を計画され、活発に活動されておられます。

京都SKYセンターでも次に繋がるよう、できるだけ足掛かりを作って、受講生の肩を押ししたいという気持ちで、取り組みもを行っているところです。

■野間 どうもありがとうございました。それでは、講師としてのお立場から、SKY大学に長く御出講されている水本先生、お話し願います。

地域で語る“面白さ”のキャッチボール

■水本 SKY大学、SKYセンターができる前、府の高齢者福祉課の管轄だった時に、本学の歴史関係の先生が講師をされていて、そのお手伝いということから御縁が始まりました。'84、'85年位かと思います。

私は日本史、その中でも江戸時代が専門です。歴史関係の講座を担当し、京都市内だけでなく、北部にも出向いています。また、現在は若い方をお願いしていますが、バスツアーで行く現地見学会も年2回実施してきました。

私自身がやっているテーマは比較的地域に関わりやすい…どこにでも江戸時代の歴史はありますので、北部地域でやる場合は、その地域に関わりがあるテーマを心掛けたり、受講者との距離をなるべく近くしてお話するようにしています。

これまでは研究内容に近いところで、それをお話することが結果的に地域貢献に繋がればよいというスタ

ンスでやってきましたが、改めてどういう戦略で取り組むべきか考える時期に来ているように思います。

いずれにしても、関わる教員側に課題意識や興味があって始めてうまく行く。こちらが面白い問題と受講者の関心とがマッチすることが大事なかなと思います。

■野間 社会人入学生として大学の外と内から、両方の学習経験をされた経歴をお持ちの K さん、府立大学での学習・教育についての印象はいかがですか。

学びが精神面のターニングポイントに

■ K 素朴な感想から申し上げますと、非常に楽しかったという言葉に尽きます。かなりハードなスケジュールでしたが、授業を休みたくない、聞き漏らしたくないという思いでいっぱいでした。専門家のお話というのはこんなにも奥深いものなのだとということで感嘆しつつ聴いていました。加えて、講義自体が非常に自分の実生活に関わりあるテーマが多かったのも、こちら側の関心・意欲が高まっていった点も大きいと思います。

府立大学で学んで得た点は、意識していなかった矛盾や疑問を自覚することができたということと、それまで社会に対して非常に無力だと思っていた自分に、より良い福祉社会を築きたいという強い思いが生まれてきて、精神面でのターニングポイントになったという点が非常に大きいと思います。それは、この大学に教育学、法学、経済学といった非常に幅広い多才な先生方がおられ、その先生方から広範な知識を得ることにより、現れたものだと思います。

■野間 外から見た府立大学という話ですが、公立大学の存在理由を明確にする必要があると言われていきます。同じことが、SKY大学でもあったとお聞きしましたが、そのあたりはいかがでしょう。

■泉谷 そうですね、存在意義を自ら問わなければならないという時代において、府立大学におかれても、非常に口幅ったいのですが同様の立場だと思います。

SKY大学の立場で言えば、民間のカルチャー講座の場合、金の切れ目が縁の切れ目といいたいでしょうか、終わったら、はい、さようならでいいのですが、我々はそれではいけない。勉強したことのみで終わるのでなく、どう次に繋げていただくか。各種のサークルや団体に入るなど活動の輪を広げ、学習を継続していただける仕組みづくりが必要になります。そこに我々が生きていく術があると考えています。

■水本 「新・SKY」になって「あ、変わったな」と思



左：水本教授 中央： K さん 右：築山教授

左：竹葉学長 中央：泉谷副理事長 右：野間教授



ったのは、講師を迎える人が地域の人、つまり今までの受講者がスタッフとしてお世話して下さるようになった点です。

■**竹葉** 大学も府民の生涯学習の場として、何らかの役割を果たさなければという漠然とした思いはあるんですが。大学側のサポート、お金の出し方、講義の仕方、その辺りを整理していく必要があるのではないかと考えています。このあたりはいかがでしょうか。

「気づき」・意識化の機会をつくる

■**築山** 10年ほど前に府大独自の将来計画の議論をしている時に、大学と、いわゆるカルチャースクール、高等教育機関と民間事業との違いをどのように考えるかを意識しました。高等教育機関は社会人も学ぶことのできる場として、キャッチフーズ的には、「多様な学生が学ぶ大学」ということを掲げましたが、それはちょうど川越さんのように一定の社会経験を積まれた方が、自分の生活上のニーズや暮らしの具体的な内容との関係で生まれてくる関心などから、「社会人の学びの場」を求めて入学されることを想定していました。

今日的には行政と住民の協働（コラボレーション）というテーマがあります。そういう客観的なニーズもあり、大学と民間のカルチャーの差別化だけではなく、大学で学んだことが、その人自身が社会の中でどう生きていくかということと繋がっていく必然性、流れが出てきているように思います。

その状況のもとで、府立大学が公立大学として存在する意味を探っていくと、生涯学習事業や活動の展開についても考えられると思います。

先ほど K さんのお話を聞いていて、すごいなと思ったのは、「意識していなかった矛盾や疑問の自覚」とおっしゃったところ。SKY大学や桜楓講座のような「講座」は、そのような気づきの場、意識化の場として重要な役割を担っていると思います。

■**泉谷** 今の60代は、かつての高齢という域ではないですし、向上心が旺盛ですから、できるだけ広がりのある地域貢献活動に参画していただく取り組みが、必要になると思います。

■**野間** SKY大学OBなどから生まれた観光ガイドの活動は、学習成果を実際の活動に生かすスタイルとして非常に成功した事例ですが、今後、府立大学でも、こ

のような好ましいサイクルを生むアイデアや方策はないでしょうか。

■**水本** 大学としての経験交流、例えば講師同士が、北部地域へ行った場合にはこういう話をすると反応がいいなど、経験を踏まえた意見交換や交流は、これまでほとんど考えたことがありません。一度やってみる価値はあると思います。

大学と府民をつなぐ窓を開く

■**野間** 今日は、SKY大学のお話を中心に進めてきましたが、講師陣をうまく活用する府民との間のインターフェイスのようなくみが大変ですね。大学がいきなり地域に出て行っても、ノウハウも無く繋がりもない中では、うまく機能しない。大学は大学で様々な取り組みを行うが、地域とのインターフェイスも含め、実施の形について、こういう場でアイデアを出していただいたらやりやすいと思います。

■**竹葉** 地域貢献のもう一つの課題、研究面における産業界との共同・連携についても、同様の問題があります。大学が直接飛び込んでいってもなかなかうまくいかない。ノウハウを持つ第三者に仲介に入ってもらって非常に活性化します。そのようなことが、生涯教育の場合もあるのではないのでしょうか。意欲の高い方々が広範囲の学習をする、潜在的要望はいろいろあっても、直接府立大学と結び付きにくい。そのような仕組みがない。その辺ももう少し、将来的に開発していく必要があるのではないかと考えています。

2007年問題をチャンスにする仕掛けを

■**泉谷** いわゆる「2007年問題」を考慮に入れると、豊富な人材があるのに、活用しないと勿体ないじゃないかという視点で、仕掛けを本格的に考えていくことが差し迫った課題になってくると思います。

■**野間** そろそろ予定の時間になりました。今後の本学の生涯学習事業、地域貢献活動の展開にとって、とても示唆に富んだ内容だったと思います。

本日は、お忙しいところどうもありがとうございました。

（紙幅の都合で、当日の懇談内容を大幅に圧縮、あるいは割愛しています。このほかに話題としては、事業の広報や、評価のあり方なども話題となりました。）

※財団法人京都SKYセンター

平成2年6月に、京都府内各界の出捐により設立された公益法人。高齢者の方の自主的な活動支援を実施。本学の生涯教育事業共催団体です。（6頁参照）

府立大学の生涯学習事業

今年度実施されている生涯学習事業を総合的に御紹介。座学の他、附属施設では農場体験等、野外での生涯教育活動も行っています。

■桜楓講座

最新の研究成果や時代のトピックスを分かり易く解説する無料公開講座。今年実施された4コースの内容をご紹介します。

●Aコース ひとときばかり日常生活をはなれたドイツ文学の話 「失われた愛の言葉を求めて ―ゲーテから戦後ドイツへ―」

★講師からひとこと(文学部 青地伯水助教授)

愛を持ったものだけが近づける「言葉」を取り上げた当講座。参加者の皆さんは霜雪を頂いておられる方が大半でしたので、今回は「虫食い」テキストを用意しました。皆さんが興味を持って話の展開を迫るように、箇条書き風のテキストの所々に空欄のカッコを配置しておきます。空欄に話が及べば、埋めるべき語を大きな文字で板書し話を追いながら字を書くので、皆さん最後まで居眠りする暇がなかったようです。大学生のためにも同じものを作ろうかな?!

●Bコース 京都を中心としてひろがる体験交流のかたち 「京都・日本・東アジアのグリーンツーリズム ―農山漁村・農林漁業体験の楽しみ方―」

★講師からひとこと(農学研究科 宮崎猛教授)

私の話の内容は、当時一冊の本として出版すべく校正をしていた研究成果でした。京都、日本、東アジア、タイといった各章に散りばめた論旨を、公開講座の短い時間の中で府民にわかりやすく話すという点では、少し問題があったかもしれませんが、欲張った研究成果を公表するよりも、参加者の理解を促すような話の内容が、公開講座には求められることを改めて考えさせられました。

●Cコース 地域特性・住民の要求をまちづくりに活かす 「まちづくりと自治体の条例」

★講師からひとこと(福祉社会学部 大田直史教授)

一般になじみの薄い行政法の話のなかでも身近な問題として考えていただけるよう、また法律の規制緩和の進行のなかで地域の住環境を守っていく方法として条例が重要な役割を果たすという今日的な問題でもあってテーマを設定しました。自治体で「まちづくり」関係のお仕事を担当されている方々にも来聴いただきましたが、そのような方々以外には法技術的な問題をなお十分にかみ砕いたお話しとならなかったことが反省点です。

●Dコース 最新の町家研究をわかりやすく解説 「日本の中の京町家 ―江戸の町家も京町家?―」

★講師からひとこと(人間環境学部 大場修教授)

秋の桜楓講座を担当させて頂き、京町家と日本各地の伝統的な町家についてお話ししました。出来るだけヴィジュアルにと、スライドを駆使して紙芝居のようになりましたが、おかげで大変ご熱心にお聞き頂きました。通り一遍な内容では不安で、町家研究の最新の話題を軸にお話ししましたが、的確なご質問も頂き、予想した通り参加者のレベルの高さを実感しました。

欲を言えば、普通の授業を補足する意味で学生諸君にも聞いてほしいと思っていたのですが、他の授業などと重なり、この点は少し残念でした。これからも機会を捉えて積極的に発信したいと考えています。どんどんお声をかけて下さい。

・学生時代に戻ったようで有意義な時間。該当作品を読み返そうと思った。
・楽しいお話でした。心にゆとりが出来たように思います。

参加者より

・普段聞けない専門分野の先生の話が聞けて良かった。食品関係の講座を聴きたい。
・初めての受講だが普段あまり知らないことの出来ない事を見たり聞いたりでき大変興味深かった。

参加者より

その他、昨年には大河ドラマで人気を博した義経伝説や、社会問題となっている薬物中毒など、トピックス的なテーマの他、京都の森林や健康機能が注目されているペプチドなど身近なテーマも企画しました。

■リカレント学習講座

職業人をはじめとする社会人を対象に、専門的かつ体系的な学習の場として開講される有料の講座です。

平成18年度はミュージカルシリーズ第2弾として、『「メアリー・ポピンズ」で学ぼう英語とイギリス社会』をテーマに10月～11月にかけて全5回の日程で開催されました。



子供向けの読み物やディズニーのミュージカルで著名な『メアリー・ポピンズ』。しかし、その中には奥深いイギリスの文化・社会が垣間見えます。今年度の講座ではそれらの事項を解きほぐしながら、作品とイギリス文化・社会についてより深く理解することを目標としました。

受講生の声

- ・元々興味を持っていた題材に更に別の見方が加わった。
- ・歌等もまじえ、工夫された内容が楽しかった。
- ・作品の舞台である英国に行きたくなった。

シリーズ第1弾で取り上げた「マイフェア・レディ」は、リカレント学習講座の内容をもとに本が発行されました。実際の講座と同じく、作品を深く理解するための手引書として好評です。

「講座『マイ・フェア・レディ』オードリーと学ぼう、英語と英国社会」

米倉 綽 編著 英潮社

地域福祉活動に取り組む方にー福祉社会学部のリカレント講座ー

福祉社会学部では、学部発足の1997年度から2003年度まで、社会福祉関係職員、地域福祉活動に取り組んでいる住民などを対象に、学部独自に「キャリアアップセミナー」と銘打って取り組んできました。いずれも少人数（15～22人）のゼミ形式で、専門的で発展的な学習を目指しました。受講者は、自治体一般行政、福祉事務所、児童相談所、保育所、民間コンサルなど多岐にわたり、専門家間のネットワーク形成や新たな事業展開の面で貴重な成果を見ることができました。現在、学部の新たな展開と合わせて今後の企画を検討中です。



上記講座の他、これまでも様々な分野の専門講座を行っています。いずれも連続講座のかたちを生かして、参加者の方が理解しやすく専門性の高い講座となっています。社会生活の中で役立つ知識を得られることのほか、本学の教員の研究内容を学外の方に深く知っていただく場としても好評を博しました。

- 1999年 「21世紀の食と農を考える」 10/9～11/27(全7回)
- 「北欧と日本の福祉」 9/12～12/12(全8回)
- 2000年 「日中の古典を読む」 10/7～11/25(全7回)
- 「21世紀に向けての社会福祉実践」 6/3～11/25(全8回)
- 2001年 「現代福祉と公共政策」 10/12～12/15(全8回)
- 「インタラクティブなWebページ作成の基礎」 11/10～12/8(全5回)
- 2002年 「児童虐待問題発見の意味と児童福祉施策・実務への影響」 9/21～12/21(全7回)
- 「森林科学を学びなおす」 9/28～11/30(全7回)
- 2003年 「地域協同の子育てをつくる」 9/21～11/16(全5回)
- 「オードリーと一緒に英語を学ぼう、イギリスを学ぼう」 9/27～11/15(全8回)

■地域文化セミナー

より多くの府民の皆さんに公開講座を受講していただきたいとの思いから府立大学・府立医科大学の両府立大学が地元市町村等と共催し、両大学の教員が講師として地元市町村等に出向く出張講座。府民の関心が高いテーマについて市町村からの依頼を受けわかりやすく解説する講座が好評です。

府立大学では今年度、9市町と共催で府内各地でセミナーを行っています。



- 6月6日 長岡京市 「ピンピンコロリの栄養学」 南出 隆久(人)
- 6月21日 舞鶴市 「なんでそんなことするの?—「発達」の観点から子どもの「困った行動」を読み解く—」 服部 敬子(福)
- 6月27日 久御山町 「食べ物と食べ方で紡ぐ健康長寿」 中坊 幸弘(人)
- 6月29日 京丹後市 「野菜の生命力」 藤目 幸擴(農)
- 7月16日 綾部市 「ライフスタイルの変化が引き起こす食の問題」 大谷 貴美子(人)
- 10月11日 大山崎町 「日明交流と西国海道」 上田 純一(文)
- 20日 大山崎町 「冷泉家時雨亭文庫と藤原定家」 赤瀬 信吾(文)
- 11月29日 山城町 「生き生きシニアライフと食」 大谷 貴美子(人)
- 12月8日 宮津市 「若年期からの骨粗しょう症予防」 東 あかね(人)
- 12月14日 向日市 「『キモノ』はなぜ、日本の民族衣装になったのか」 森 理恵(人)



府立大学では、各教員の講演可能なテーマを約300件用意し、共催の市町村を募り、講師派遣を行います。

各講演の受講については、共催市町村での受付となります。

■新・京都SKY大学

巻頭座談会にもお話のあった、(財)京都SKYセンターと共催で行う、高齢化社会・社会参加の時代に対応した通年制の生涯学習講座です。本学は文学・歴史活動コースのメイン会場となるほか、様々な分野の講座に教員が出講しています。

<今年度「新・京都SKY大学」の講座>(9~12月本学出講分)

「及ばぬ恋の物語」	文学部	安達 敬子
「高齢者の食保健学」	人間環境学部	中坊 幸弘
「第一次世界大戦をとおりて現代社会を見る①・②」	文学部	小林 啓治
「『好色一代男』から『二代男』へ」	文学部	藤原 英城
「福祉と学びのまちづくり」	福祉社会学部	築山 崇
「細川幽斎と古今伝授①・②」	文学部	赤瀬 信吾
「元禄の前句付」	文学部	母利 司朗

府内にお住まいの概ね60歳以上(資格取得準備コースは概ね50歳以上)の方を対象に通常9月開講、翌年の7月まで開催されます。受講についてなど、詳しくは、財団法人京都SKYセンター(TEL 075-241-0226)にお問い合わせください。

附属研究施設で体験型講座！

農学部附属農場（精華町）及び演習林（南丹市ほか）の2施設では座学だけでなく、体験型の講座も実施しています。自然の中で実地で学ぶ講座は多くの受講生に好評を博しています。

■農場ユーカーチャーデー

農場のブドウおいしかった ～8月4日開催 本学附属農場（精華町）～

夏休みに入った8月4日、農学部附属農場では、小学生を対象に農業体験講座「ユーカーチャーデー」を開催しました。この催しは、日頃、農業に接する機会の少ない子供たちに食べ物のできる過程を体験してもらおうと毎年実施しているもので、京都市内を中心に昨年の倍近い応募があり、小学生37名と保護者31名の参加を受け入れました。

最高気温34.7℃を記録したこの日、参加した小学生は汗だくで、農場内の見学、農業機械の実演、野菜・花の用土づくり、種まき、卵のパック詰め、また、バイオ教室と盛り沢山の内容に挑戦しました。特に、果樹園では自ら収穫したブドウ「デラウェア」を「甘くておいしい」とその場で頬張っていました。



今年は府立大学の農業同好会「はたはたクラブ」の学生10名のサポートがありました。小学生は年齢の近い女子学生のアドバイスに親しみを感じ好評でした。

参加した小学生からは「他の果物、野菜も収穫してみたい」「田植えもしてみたい」「牛のエサやりもしたい」との声が、また保護者からは「親子いっしょの体験は新鮮でした」また「親は見ているだけ、親のプログラムも考えてほしい」「人数が多くて運営が円滑でなかった」等の意見があり、今後にかかすことが課題です。

■演習林野外セミナー

森林観察ガイド養成の総括 ～5月13日開催 本学・京都府立植物園～

新緑の冴える5月13日小雨まじりの中、演習林野外セミナーの総括編を実施しました。

この演習林セミナーは、附属大枝演習林で森林観察ガイドができる人材養成を図ることを目的に取り組んできたもので、平成3年度から14年度まで開催した演習林ウォッチングの後継事業として平成15年度から18年度まで実施したものです。



当日は、初級編・中級編を受講された43名の対象者の内33名の老若男女が本学の合同講義棟前で受付後、第3講義室にて大学院農学研究科の演習林長でもある高原光教授による日本の植生の(わが国の国土の約65%を占める2500万haは森林)その生い立ちと分布状況について熱心に講義を受けられ和やかな雰囲気の中で、午前中は終了しました。

なお、昼からは隣接の府立植物園のご協力を得て主な樹木の同定法(見分け方)について小倉樹木係長より植物園の歴史を含めてユーモラスで丁寧な説明を受けました。樹木の種類の多さと生態の奥深さに興味深々の野外セミナーになりました。

最後に修了式を行い演習林長より修了証書の交付を行うとともに、都市近郊にある大枝演習林は広く府民の方々の入山が増えることが予想される中、大枝演習林の樹木や生態等自然についてご案内していただくときに役にたつよう腕章を作成し、後日お届けすることをお約束し総括編を終了しました。参考までに送付した腕章は右の写真のとおりです。

今後、この府立大学のロゴマーク入りの森の案内人という腕章をつけた方々のご活躍を期待しています。



キャンパスからひろがる「まなび」 ―地域調査ゼミ・研究プロジェクトの試み―

◆文学部 京丹後市での史料調査合宿―地域貢献と教育の接点

文学研究科 史学専攻ゼミ

私が担当する大学院のゼミでは、毎年、修論準備報告をかねて8月下旬に合宿を行っている。右京区京北にある京都府立ゼミナールハウスを使うことが多いが、今年は異なる内容で実施した。現在、史学科の教員が中心となって編纂に関わっている『京丹後市史』の史料調査とし合宿をすることにしたのである。

京丹後市には地域によって近代の行政文書がかなりの数で残っており、目録の整備は進んでいるが、手のつけられていないものもある。そこで、京丹後市教育委員会の小山元孝さんと相談して、弥栄町の行政文書（段ボール10数箱分）の簿冊目録をとることになったのである。これらの史料は、戦前に弥栄町を構成していた村の文書で、明治後半から1950年代までを中心とする文書群である。年度ごとの冊数が多く、内容も充実しているから、地域の生活や政治を知るために大変貴重なものである。500点以上はありそうなので、整理には10人程度で2泊3日必要と概算した。近現代史の院生だけでは足りないため、卒論指導をしている4回生と、院生の知人にも声をかけた。結局、学外から立命館大学の院生など3人が加わって、総勢9人となった。

8月29日朝、京都を出発し、お昼前に網野駅で集合。そこから木津にある網野郷土資料館に車で移動し、調査を開始した。2～3人のグループを作り、まずは仮目録を作成する。この作業は2日目の午前中に終えた。午後からは年度ごとに並び替え、本目録作成に取りかかる。それを終えてもう一度段ボール箱に納めるわけだが、終了したのは3日目の6時前。京都に帰ることのできる最終の電車でギリギリの時間であった。

院生や学生にとってハードなスケジュールであったが、調査の方法や段取りの工夫について互いに意見を出し合いながら進めていくことは、大変良い経験になったと思われる。宿に帰ってからは2日も懇親会をもち、それぞれの大学の研究環境、現在の社会状況や個人の進路・趣味など、話題も尽きず大いに盛り上がった。また、宿舎の向かいの温泉も忘れがたい思い出になったことと思う。木津温泉は京都府で最も古い温泉地である。観光地化を免れた（取り残された？）1960年代の雰囲気そのものの外湯と36度のぬるい湯を、院生たちは「炭坑の風呂」と形容して珍しがっていた。いくつかの課題はあったものの、史料調査の方法を学び、他大学の院生とも交流し、また京丹後市の史料保存にも貢献できるという一石三鳥の合宿になった。今後もこうした合宿を、発展的に継続していきたいと考えている。（小林 啓治）



ニューフェース

（平成18年4月1日付）

文学部文学科英語学講座

教授 **菅山 謙正**（すがやま けんせい） 1952(昭和27)年11月生

<主な研究領域>英語学・言語学

言語の統語構造と意味構造の間にある関係の解明を究極的な目標にして研究を行っています。とくに英語の場合について、おもにRichard HudsonのWord Grammar理論の枠組みを用いています。その成果は昨年12月、LondonのContinuum社からWord Grammarという論文集として刊行。また、語彙文法の立場から個々の語彙についてその文法的特性についても研究中です。これらの研究と並行して、英語の基本語彙文法辞典、『ジーニアス英和辞典』などの編集・改訂にも参加。現在、科学研究費でEstuary Englishの英語学的研究も行っています。本学での英語学の教育・研究の進展に寄与したいと思います。



福祉社会学部福祉社会学科 法・経済学講座

助教授 **川勝 健志**（かわかつ たけし） 1974(昭和49)年7月生

<主な研究領域>財政学・地方財政論・環境経済学

環境・経済・社会の持続可能性を高める地域づくりと地方環境税を中心とする税財政制度の設計問題や政策効果について研究しています。本学では、「地域から持続可能な福祉社会を考える」ことこそ、人間生活の基盤である地域社会の将来像をデザインすることに他ならないという主旨のもと、教育・研究に取り組みたいと考えています。

◆福祉社会学部 京丹後市調査を実施

福祉社会学部専門演習Ⅰ「福祉社会と財政」

10月3日から5日の3日間、3回生13名と4回生2名、それに指導を担当している教員2名（小澤、川勝）の総勢17名で京丹後市への地域調査を行った。ゼミでは1999年度から毎年実施しているもので、これまで長野県、山梨県の小さい村や町を対象に、地域における住民の暮らしと行政との関わり、それぞれの地域における特色ある福祉実践や住民主体の地域づくりなどを学んできた。今年の対象に選んだのは京丹後市で2年前の4月に6町が合併してできた新しい市である。

広大な市域全体を3日間で駆け回った。京丹後市役所でのヒアリング、久美浜町での一区まちづくり協議会の取り組み、弥栄町ではやさか病院、老人保健施設ふくじゅで保健・医療・福祉活動について、大宮町では常吉村営百貨店や奥大野村づくり委員会における地域活性化の取り組み、網野町では琴引浜の鳴き砂を守る会活動と鳴き砂文化館、また宿泊した丹後町の「はしうど荘」ではかつての3セク経営から指定管理者への移行の実状を従業員の方に話を聞いたりもした。

実に盛りだくさんで時間に追われ、一つ一つのヒアリングとしては突っ込みが不足がちでもあったが、夏休み前に行った事前学習の内容を思い返しなが、現地で行政の担当者や地域の住民の方の生の話を聞いて学生たちには大きな刺激となったようである。自治体行政のあり方やそもそも何のための合併であったのかを問いかける感想もあった。

これから3回生の学生たち自身で報告書作成を行う。そこで今回の調査の成果や学んだことを客観化していく。報告書の構成は、京丹後市の概況（地勢、歴史、産業、人口や旧6町の特徴など）、合併に至る経過と合併における行政水準の「統一」、新市における行財政改革計画とその実施、指定管理者制度導入の方針とその実際、行政と市民との協働、京丹後市からみた地域再生計画（京都府下で採択された地域再生計画は9つだが、うち2つは京丹後市のものである）の実態と評価、地域振興協議会方式による地域づくり、大宮町における村づくり委員会と常吉村営百貨店の取り組み、久美浜町一区まちづくり協議会による地域づくりと自治公民館活動の経験、弥栄町における先進的な保健・医療・福祉活動の現在、網野町琴引浜「鳴き砂を守る会」活動と住民主体の地域づくりなどとなる予定だ。

例年のことであるが、年末にかけて学生は四苦八苦の連続となる。指導する教員も一緒に四苦八苦する。だが、そこから得られる教育効果は抜群である。完成した報告書で確認してほしい。（小澤 修司）



ニューフェース

(平成18年4月1日付)



福祉社会学部福祉社会学科 福祉・社会学講座
講師 **中根 成寿**（なかね なるひさ） 1976（昭和51年）年11月生
＜主な研究領域＞家族社会学・障害学

「障害者問題」は福祉だけの課題ではなく、家族や社会を巡る政治課題である、と捉え、障害者家族の研究を継続して行っています。研究を通じて実現したいことは「介護殺人」が社会からなくなること。またそれが起こったときに社会がそれを「あってはならないこと」としっかりと批判できること。フィールドワークや質的調査法についても継続的に研究を行っています。



人間環境学部環境デザイン学科 住環境学講座
教授 **内田 保博**（うちだ やすひろ） 1954（昭和29）年3月生
＜主な研究領域＞建築構造学

建物の耐震性能を向上させるため、鉄骨構造や鉄筋コンクリート構造などの力学的挙動、力学的性能や構造設計法について調べてきました。本学では、これらの構造を含めた様々な構造に関する研究を、地域の人々の協力を得ながら進めていきたいと考えています。



農学研究科生物生産環境学専攻
講師 **上田 正文**（うえだ まさふみ） 1965（昭和40）年9月生
＜主な研究領域＞森林生態学・樹木水分生理学

森林の主要構成である樹木の水分生理状態を調べることにより、「樹木の生態」、「樹木の健全度」および「樹木と他の生物との関わり」について明らかにし、樹木の生理生態を考慮した森林管理のあり方について考えていきたいと思っています。

◆人間環境学部 生ごみコンポストを媒体とした都市型食育コミュニティづくり

人間環境学部 南出隆久

「健康日本21」が施行されて6年が経過したが、目標値達成までは道半ばである。こうしたなか、食育基本法が平成17年7月施行、食育推進基本計画が平成18年3月に決定され、国民の心身の健康の増進と豊かな人間形成への取り組みが進められようとしている。この基本計画のなかに食育を総合的に促進するための事項が示されているが、具体的な実践はこれからの課題である。

食事により排出される下処理くず、賞味期限切れ食品や食べ残しなど、増加する生ごみをどのように処理するかは「飽食の時代」といわれる現代の生活と切り離せない問題である。スロータウンやスローライフをめざすには、身近なことであるが、この生ごみを減らす対策が求められるところである。そのためには、食材の計画的購入、適正な保存方法、調理時のムダを省くなどの工夫から始めることである。それでも出てくる生ごみは、メタンガス利用、Refuse Derived Fuel (RDF:ごみ固形燃料)、飼料化、堆肥化などの再利用が行なわれている。その一つとしての堆肥化には、コンポスター、EM菌の利用などがあるが、技術面や煩雑さなどの課題が多い。最近、家庭用生ごみ処理機として発酵式と乾燥式の電動生ごみ処理機が販売されるようになり、徐々にではあるが生ごみの削減へ向けての取り組みが進んできた。



ここでは、食育基本法第20条、23条で示されている施策から生ごみを媒体に循環型・共同参画型社会をめざすライフスタイルのあり方の食育実践モデルづくりへの取り組みを紹介する。

1. 小学生の食育における学校給食残飯の活用

食育基本法が施行され、様々な経験を通じ「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践できる人間を育てることを家庭、学校、保育所、地域などを中心に、国民運動として推進することが唱われている。しかし、実際どのように食育の推進をすればよいのかに関する具体例は、実践現場に沿った内容の工夫が求められており、これからの課題である。

この研究は、小学4、5年生児童を対象に自分たちの住む地域を知り、地域をよくしたいという意識を育てるとともに、自分、家族、地域を取り巻く食の環境について考える食育プログラムを開発するため、給食から出た生ごみを用い農作業を行うなかで、対象児童、保護者、小学校教師へのアンケート調査を実施し、その結果をもとに実践可能な食育プログラムの提案を行った。

とうがらし、かぶ、だいこんを栽培し、作物の生長と収穫さらに調理までの生産から食べるまでの体験実習を行った。栽培した作物は、地元野菜（京野菜）である万願寺とうがらし、聖護院かぶ、聖護院だいこんで、一般に市販されている野菜との違いと生育過程での変化についても毎月1回大学の圃場で観察した。

学習初期（6～7月）と学習後期（10～11月）に行った給食の残飯量調査では、初期に比べ後期の食べ残し量が46.5%減少した。同時に行った全校の残飯量調査では29.7%しか減少しなかったことから、4年生への学習効果がみられる。保護者アンケートでは、学習の実施を経て子供の野菜への興味が増したかという質問に対し、77%が肯定的であった。食育の必要性に関しては100%が肯定的に考えており、自分もこのような学習に参加してみたいと思う保護者は、「少し思う」も含むと86%にのぼった。教師のアンケート回答では、実習に対して評価は高く、土に触れることは児童にとってよかったという意見であった。

収穫した野菜の一部は、「おすそわけ」として子供達から提供してもらい、作ったことに対する思い入れをメッセージに托して、地域のデューサービスの配達弁当の食材にした。子供達の手紙や喫食者からの礼状は、両者の心に感動をもたらし、小学校と地域の繋がりをより強くした。

この体験学習は、食育の一環ではあるが、生ごみに焦点を当てながら農業や地球環境を学習するとともに地域の人達が交流を通してみんなの心が豊かになる、「食・農・環・心」教育である。

2. 食の循環をめざした、小学校⇄地域⇄大学の連携による食育実践づくり

私たちの研究室は、京のアジェンダ21フォーラム「食の循環ワーキンググループ」と協同で地域にやさしい食生活をめざした活動を行っている。

生ごみからの堆肥づくりを地域ぐるみで行う取り組みである。地域住民に協力をお願いし、週2回の市のごみ回収のときに家庭で出る生ごみを分別してもらい大学生が回収して、大学で乾燥して保存する。貯まった乾燥生ごみは、秋植用として6月、春植用として12月に畑に埋め込み自然に発酵させ堆肥として利用する。

毎週土曜日の農場体験には30人以上の地域の方が参加し、ときには子供連れやご夫婦で来られる。勉強会や収穫祭も時々開催される。地域の小学生の環境教育授業として、あるいは食と環境に関心ある住民の交流農園として、大学の教員、学生が協力して都市コミュニティ型循環システムをめざして活動している。

参考資料

暮らしと環境 三浦敏明・扇谷悟 三共出版(1998)／暮らしの中の「農と食」 仙北富志和 日本評論社(1996)／だれでもできる地球を守る3R大作戦 山本耕平 合同出版(2001)／ごみとリサイクル 寄本勝美 岩波新書(2001)／やってみませんか”生ごみ”からの堆肥づくり 京のアジェンダ 21フォーラム(2004)／食育のすすめ方 食農教育 40 農文協(2005)

◆農学研究科 天橋立の松並木保全への取り組み

農学研究科 生物生産環境学専攻 教授 池田武文



京都府宮津市に位置する天橋立は日本三景の一つに数えられ、古くより日本を代表する景勝地として知られており、丹後地方の貴重な観光資源となっています。その天橋立に白砂青松の松並木は欠かすことはできません。この松並木が近年、マツ枯れや台風により被害を受けました。天橋立のマツの中には樹齢300年を超えるものも含まれています。また今はまだ若いマツが今後200年、300年と生き続け、天橋立の美しい白砂青松の景観が次の世代、さらにその次の世代へと受け継がれていくことが望まれています。私たちの森林生態学研究室では、関連する行政機関、調査研究機関そして地元の方々とともにこの松並木を永く保全するための取り組みを行い、マツ枯れの防除に関しては一定の成果を得ました。さらに今、松並木の現状を森林生態学や森林保護学の視点から再点検し、将来を予測することで、今後取り組むべき方策を考え、実施しようとしています。マツは私たちの寿命の数倍も生き続けます。私たちは松並木をじっくり見守る必要があります。そのために、若い学生諸君のなかから天橋立を見守る後継者が生まれることを期待しています。

ニューフェース

(平成18年7月1日付 以降)



農学研究科生物機能学専攻

教授 佐藤 茂(さとう しげる) 1950(昭和25)年3月生

<主な研究領域>植物生理学、園芸植物工学

植物ホルモンエチレンの生合成と作用、花の開花と老化の仕組み、遺伝子組み換えによる長寿命花卉の作出、木質バイオマス生産の研究をしてきました。本学でも、地域の農業・園芸の振興を視野に入れながら、これらの研究を進めたいと考えています。



人間環境学部環境デザイン学科 住環境学講座

教授 尾崎 明仁(おざき あきひと) 1963(昭和38)年3月生

<主な研究領域>建築環境・設備、建築物理

熱・物質・空気の移動など建築で発生する物理現象を数式モデルで表現し、コンピュータシミュレーションによる解析技術を開発しています。また、その技術を応用して各種条件下における建築環境を理論的に予測・検証し、居住環境・省エネルギー性・耐久性に優れた建築の機能デザインを提案しています。



農学研究科生物生産環境学専攻

助教授 高濱 淳一郎(たかはま じゅんいちろう) 1965(昭和40)年10月生

<主な研究領域>土石流による土砂流出解析、土石流の侵食堆積に関する実験的研究

幅広い条件下で土石流の流出氾濫過程を予測評価することができるシミュレーションモデルを開発するとともに、土石流の侵食堆積に関する実験研究を行ってきました。これらの成果を生かし、山地流域からの土砂流出解析に関する研究を進めていきたいと考えています。

研究室へようこそ

人間環境学部環境デザイン学科住環境学専攻 講師 山川 肇

ごみ処理費用は誰が払うべき？

この10月から、京都市でもごみの有料化が実施されました。京都市民でない方も、朝、道路脇に黄色いごみ袋が並んでいるのを見かけた方も多いのではないかと思います。実はこの有料化が、私の主たる研究テーマです。

私の専門は廃棄物管理です（廃棄物学会という学会もちゃんとあります）。研究室では、有料化の評価・歴史、容器包装リサイクルと拡大生産者責任、ごみ減量行動の実態と要因、建築系廃棄物の削減、環境配慮型流通・販売のあり方、ごみ処理事業経営、エコまつりなどについて研究しています。中でも有料化は、私自身、学生時代から研究を続けているテーマです。

有料化というと、ごみ減量効果が注目されがちですが、最近、私は、費用負担のあり方を変えるという効果にも関心をもっています。出すごみの量に応じてごみ処理費用を負担する有料化という制度は、ごみをたくさん出そうがほとんど出していなかろうが関係なく税で負担する制度よりも、費用負担の点で公平ではないかと考えるからです。

ただし、生産者がまったく負担しない制度でよいかというと、それも疑問があります。流通のロスを減らすために生産者が容器包装をつけるとか、製品に有害物質を使ったために処理費用が高くなるなど、生産者に責任がある部分も否定できないからです。

税と料金と生産者責任、この3つの関係をどのようにするのが、ごみ処理・リサイクルの費用負担のあり方として望ましいのでしょうか。こんなことも私の研究テーマのひとつです。私はなかなかその答えが出せずに悩んでいますが、みなさんはどのように思われますか？

卒業生の声

尼崎市役所 美化環境局 環境対策部 環境政策課

農学研究科 生物生産環境学専攻 2006年3月卒業 M. K.

私は現在、尼崎市役所の環境政策課で働いています。この部署では名前の通り、地球環境及び自然環境の保全に係る企画調整を行っています。

大学時代は、土壌化学研究室に所属し土壌化学や環境化学、分析化学を中心に勉強し、卒業後は環境に関わる仕事がしたいと考え、本市の環境衛生職を志望しました。

私は、環境マネジメントシステム（ISO14001）の運用事務を主に担当しています。環境マネジメントシステムとは、まず環境方針をたて、その実現のために計画（Plan）し、それを実施及び運用（Do）し、その結果を点検及び是正（Check）し、もし不都合があったならそれを見直し（Action）するというPDCAサイクルを繰り返すことにより、継続的に環境負荷の削減等を図る仕組みを言います。

現在97の所属から上がってくるデータを取りまとめ、全庁に報告、周知を行っています。

配属当初は、部局の事業内容や、それらが業務を通じて環境にどのような影響を及ぼすかすら見当もつきませんでした。一言に『環境』と言っても、それには様々な角度からの見方があり、大学で学んだ以上に広範な知識が必要とされることを知りました。まだまだ勉強中のことが多く戸惑いもありますが、よき先輩方に支えられ、今では楽しさも感じています。

環境面から多くの人に愛される町作りができるよう、これからも頑張りたいです。

編集後記

府民の学びの場としての府立大学

広報委員 築山 崇

各種講座・セミナー、社会人入学、住民と学生との交流から生まれる学びなど、大学の地域貢献のかたちは、工夫次第で多様に広がります。今号の特集がそのヒントになれば幸いです。研究開発面でのいわゆる産・学・公の協同・連携については、次年度の企画を予定しています。

府大広報 No.153 ー地域貢献特集号ー 京都府立大学広報委員会 2006.11.24 発行

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 Tel.075-703-5101 京都府広報物No.1802039